武蔵野幕屋 年頭集会

創造神

――創世記第１～２章――

１９７７年１月９日
小池辰雄

静動一如　御霊の光で読む　非科学・超科学「光あれ！」　日の丸　神の像に即して　霊止
安息日　神気と土器　生命の樹と善悪を知る樹　わが骨の骨、肉の肉　神の創造力をいただく
霊に憑かれて論理的な運びではない

【創世記１】

1 元始に神 天地を創造たまえり。2 地は定形なく曠空くして、黒暗淵の面にあり。神の霊 水の面を覆いたりき。3 神 光あれと言いたまいければ光ありき。

4 神 光を善と観たまえり。神 光と暗を分ちたまえり。5 神 光を昼と名け暗を夜と名けたまえり。夕あり朝ありき。是首の日なり。

6 神 言いたまいけるは水の中に穹蒼ありて水と水とを分つべし。……8 神 穹蒼を天と名けたまえり。夕あり朝ありき是二日なり。……

26 神 言い給いけるは我儕に象りて我儕の像の如くに我儕人を造り、之に海の魚と天空の鳥と家畜と全地と地に匍う所の諸の昆虫を治めしめんと。27 神 其像の如くに人を創造たまえり。即ち神の像の如くに之を創造、之を男と女に創造たまえり。28 神 彼等を祝し、神 彼等に言いたまいけるは、生めよ、繁殖よ、地に満盈よ、之を服従せよ、又海の魚と天空の鳥と地に動く所の諸の生物を治めよ」

【創世記２】

3 神 七日を祝して之を神聖めたまえり……7 エホバ神 土の塵を以て人を造り、生気をその鼻に吹き入れたまえり。人即ち生霊となりぬ。8 エホバ神 エデンの東の方に園を設けてその造りし人を其処に置きたまえり。9 エホバ神 観るに美麗しく食うに善き各種の樹を土地より生ぜしめ、又園の中に生命の樹および善悪を知る樹を生ぜしめ給えり。10 河エデンより出て園を潤し彼処より分れて四の源となれり。……16 エホバ神 其人に命じて言いたまいけるは、園の各種の樹の果は汝意のままに食うことを得、17 然ど善悪を知るの樹は汝その果を食うべからず。汝之を食う日には必ず死ぬべければなり。

18エホバ神 言いたまいけるは、人独りなるは善からず我彼に適う助者を彼のために造らんと。……

21是に於てエホバ神 アダムを熟く睡らしめ、睡りし時その肋骨の一つを取り肉をもてその処を填塞たまえり。22エホバ神 アダムより取りたる肋骨を以て女を造り、之をアダムの所に携きたりたまえり。23アダム言けるは、此こそわが骨の骨わが肉の肉なれ、此は男より取りたる者なれば之を女と名くべしと。24是故に人は其父母を離れて其妻に合い二人一体となるべし。25アダムと其妻は二人ともに裸体にして愧ざりき。

●静動一如

火山は静かに煙を吐いていますが、一朝、爆発となるともの凄い火柱をあげる。私は浅間山の火柱を見たことがありますが、すさまじいものです。静けさのうちに、いついかなる時も、真に動に展開するものを持っていなくてはいかん。また動も、静けさというものの中に深く沈潜していく、そういう動でなければいかん。それが静動一如ということです。どうぞ、そういう気持をいよいよこの福音においてわきまえていただきたい。

今日は年の始めでもありますので、今年は「旧約聖書ところどころ」というわけで、随意に場所を選んでお話しします。今日は創世記第1章と2章。これを本式にやったら大変なことです。もちろん、ある重点をつかんでお話します。

私は昔の聖書を開いたら、

「１９４０年9月22日開戦」

と書いてある。戦い（集会）を始める。9月22日に正にこの創世記第1章から始まった。とにかく創世記からずーっと黙示録までいっぺんやってしまったわけです。

私は去年の暮れに生徒諸君に言った。

「元日は君たちに会わないけれども、元旦から何か本当に始めろ。たとえば、日記を必ず書け。一日に単語を三つ覚えることを計画してみろ。その三つの単語を日記帳に書け。漢字を五つなり書く。そういうようにして地道にやりなさい」

と、話しました。ものごとはとにかく持続することが大事なんです、やり抜くことが。

私なんか、この雑誌（「ハレルヤ」誌）なんて実に不定期刊行で申し訳ないわけですけれども、とにかく断続的でもやり抜いてきました。これは死に至るまでそのつもりです。だいたい私は、昔は何をやっても三日坊主なんです。

「これではどうにもならん。何か力を得たい」

と、信仰に入ったひとつの動機がそれでもある。始めは無教会信仰ですから、それでもとにかく、ある力は来ていたんでしょうね。三日坊主といいましても、そうけなしたわけではなくて、昔は丹念に日記を書いていた時代もあります。けれども、どうも本式の力がない。

まぁ信仰に入って多少よくなったけれども、まだどうもおかしい。何か欠けている。遂に１９５０年、聖霊のバプテスマということになってから、これははっきり次元がちがってきた。

１９４０年に始まったから、10年間は私はまだ聖霊を本当に体験しない講義をしていたわけです。けれども、10年後から聖霊が来た。そうしたら、私は福音書が楽しくてしょうがなくなってきた。その後の10年間は、ほとんど新約聖書の福音書とパウロ書簡に沈潜した。福音書の福音書たる味が本当にわかったのはやはり御霊を受けてからです。

●御霊の光で読む

マルチン・ルターはこの聖書を――今度『聖書の人ルター』（著作集第７巻１９８４年刊）というのを書きますけれども――神の言葉ということを非常に強調したけれども、こういうことを言っている。

「いかなる人もこの聖書の一点でも、ヨーターという字でも、もし聖霊がなければ、それを見ることができない。

ヨータの本質が見えないと言う。

そういうわけだから、人々は本来みな曇った心を持っている。たとえこの人々は聖書の中の一切を言うことができ、またそれを人に伝えるようなことができるとしても、それでも何事もそれについて、即ち聖書について、本当に感じてもいなければ、本当に認識もしていない」

ということをはっきり言っている。彼はやはり、「ガイスト」と「ヴォルト」、「霊」と「言」を決して分けていなかった。それでなければ、ルターのあんな素晴らしい訳ができっこないですよ。ルターの聖書には、あと学問的にどんなに言葉の上で厳密な訳ができても、訳としてかなわないのは、この「ガイスト」（霊）を、

「儀文は殺し、霊は活かす」

という本当の聖書の「根源語」を掴んでいるわけです。そして、その霊的なリズムをちゃんと知っている。だから、ルターの訳は非常に詩的です。詩篇でもそうです。また、日本の詩篇の訳は素晴らしい。どうぞ、聖書はその角度から御霊の光で読んでください。

●非科学・超科学

1元始に神 天地を創造たまえり。

創造神ですね。漢文の聖書には、

「元始の時神 天地を創造せり」

と書いてある。

2地は定形なく曠空くして、黒暗淵の面にあり。神の霊 水の面を覆いたりき。

「定形（かたち）なく曠空（むなし）く」

というのは「混沌」という、ヘブライ語で

「トーフー・ワー・ボーフー」

という妙な字です。「バーラー」というのが「創造する」という字。

「神は天地を創造なさった」

という大前提の言葉です。「天地」というのは、もちろんその時の世界観からいって、見えるところの天地に相違ないですが、創世記第1章は――第2章はいよいよもってそうですけれども――ただいわゆる科学的ではもちろんない。見られたままに書いている。受けとったままに素朴に書いてある。これが案外、創造の順序を言っているということは、科学的にもある程度言える。しかしそれが科学と合っているか合ってないか、そんなことを詮索することはない。だいたい「創造」なんて科学の世界では成り立たないんだ、「神さまが造った」なんて。科学の世界でもし創造ということを言ったらば、それはむしろ非科学的である。非科学、超科学がこの聖書の啓示の真理のいき方なんですから、普通の頭で考えるとすぐ躓く。いわゆる科学的な理性で考えたら、聖書は読めない。だいたい、神が有るとか無いとかは、聖書は問題にしてないんだから。神を大々前提にして書いている。

●**「光あれ！」**

「神の霊 水の面（おもて）を覆（おおい）たりき」

と。とにかく、「造った」というところには、いわゆる論理的な順序で書いてない。霊が水の上を覆っていた。霊は気であり、空であり、また風である。みんな同じ字です。地水火風なんていうけれども。神霊が覆っていたという。一番先に混沌の世界、「カオス」です。「トーフー・ワー・ボーフー」、ギリシア語でいうと「カオス」、この混沌たるところに先ず神の霊が覆い包んでいた。

[3]**神 光あれと言いたまいければ光ありき。**

一番先の創造が光。だから、どういう宗教でも「光」という言葉が非常に出てくる。もともとこれは太陽の光をそのまま現している。漢字は素晴らしいよ、象形文字だから。

「光あれと言いたまいければ」

と。では何語で言ったんだろうか。ヘブライ語か。そうではない。ヘブライ人はヘブライ語でそういうように表現したかもしれない。聖書はヘブライ語で書いてあるから。けれども、神さまが「光あれ！」と言った言葉は、ヘブライ語でもギリシア語でもない。何語だかわからん。これは「霊言」ですよ。霊言を翻訳したら、「光あれ」という言葉なんです。

「わが言は霊なり生命なり」

とキリストが言った。即ちそれが何語であっても、その質は霊なんです。だから、キリストが一言いえば、目が開いてしまったりする。ペテロが聖霊を受ければ、跛者が立ってし

まったりするわけだ。それは、ヘブライ語で言ったから、ギリシア語で言ったから、立ったのではない。霊言だからです。その時の現れは、ギリシア語だの、ヘブライ語だの、日本語だのいろいろさ。けれども、本当の言葉というのはもう一つ奥にある。だから、音楽は素晴らしい。霊歌というのはその響きになってしまう。その響きを聞いていると、その言葉が本当に霊的な響きなら、その霊的な響きを通して言葉がわかってくるわけです。

4 **神 光を善と観たまえり。神 光と暗を分ちたまえり。**

「善」というのは道徳的に善いということではない。何とも説明できません、この「善」という言葉は「トーブ」という字ですけれども。神さまが全面的に肯定していることが善なんだ。然り、アーメンなんだ。

「神、アーメンと言い給えり」

と言ったってかまやしない。

5 **神 光を昼と名け暗を暗と名けたまえり。**

というのは、そういうように彼らはそう思って、こういうように書いているだけの話です。神さまはそう言ったか知りませんよ。けれども、とにかく事実、昼と夜があるではないですか。彼らは素朴にこの昼と夜をそういうように、神さまの宣言として受けとったということが、即ち信仰的な受けとり方なんです。科学的な受けとり方ではない。

暗が、夜が悪いなんて書いてない。夜を悪くしたのは人間の罪が悪くした。夜に悪いことをする。夜は悪いことをする時でも何でもない。夜は静かに休む時なんです。睡眠のため、あるいは冥想のため。

「夜深く汝を想う時」

という、詩篇第63篇がある。

そういうような具合で、昼もよければ夜もいい。夜、本当に熟睡する人は長生きするでしょうね、お天道さんと共に起きてお天道さんが沈むと共に眠る人は。文明人にはちょっと長すぎるけれども。文明人はその法則を破りに破っているから、だいたい百まで生きられないわけだ。そのほかたくさん法則を破っているから。作為的文明の行き過ぎだ。だから、キリストが山上の垂訓で言っている――真に自然に従った生き方です――あそこにやはり人間の生活の根本原理がある。夜はそういう安らいの時だ。夜がなかったらみんな参ってしまうよ。

夕あり朝ありき。是首の日なり。

ヘブライ人は夕方から数える。日没から次の日没まで。ヘブライ人の安息日は、金曜日の夕方から土曜日の夕方までです。イスラエルに行くと、金曜日の夕方から煮炊きしません。安息日だから何もしない。電車も走らない。相変わらず律法の民だからね。私はイスラエル旅行してびっくりした。闇の自動車が少し動いていたけれども。

イスラエルの安息日に休んで、キリスト教の安息日に休んで二度休みができてしまう、そ

ういうことをしているのがいるそうだけれども。キリスト教の方はキリストの復活の日だからね、日曜日は。一週間は日曜日から始まる。復活から始まる。日曜日は安息日だけれども、実は上から力を得る日なんです。我々は何のために集会をしているかというと、上から原動力をいただくために集会している。聖書のお説教なんかしているのではないですよ、私はなにも。皆さんと一緒に聖書を食らうためにやっているわけです。霊言を身につけるためにやっている。

●日の丸

それから、二日目は何が出来たかというと、

6 **神言いたまいけるは水の中に穹蒼（おおぞら）ありて水と水とを分かつべし。**

「水の中に穹蒼があって、上から雨が降ってくるから、上の水と下の水とを分けた」と、実に面白いことが書いてある。彼らは、天蓋があって、そこに穴があいていて、そこから雨が降ってくると思っていた。「上の水と下の水を分ける」という言い方をしている。それで、上の方の水のあるところを穹蒼と言った。穹蒼という字が正に弓状のものを表している。

8 **神穹蒼を天と名けたまえり。夕あり朝ありき是二日なり。**

「天」は「ハッシャマイーム」、「諸々の天」という複数です。私は天という字が好きだから、自分の号を「天韻」だの「天晨」だのといろいろ書く。この字は「万歳！」と、両手を挙げている人間の姿で、そこに光輪がある。漢字の解説にそういうように書いてある。人間はあたまに光の環をいただいている。即ち正に霊が止まっている霊止なんです。

私は中学・高等学校の生徒に、

「校長からこの霊止という字を教わっただけでも結構だから、お前たちは絶対に忘れるな」

と言ってある。そういうことをはっきり言う人がいなくなってしまったんだよね、今は。

日本の国旗は世界最高の国旗です。「日の丸」は誰が一番先に使ったか知ってますか。上杉謙信、武田信玄、それから豊臣秀吉です。特に秀吉は船の印に使った。それから徳川でもそうですけれども、島津斉彬が相当、国旗の制定のことを強く言った。だいたい、船に一番先に用いた。明治3年から始まっています、国旗としては。

私は、元日から三日間、家の門に国旗を立てっ放しにした。だいたい国旗をおそまつにして、ほとんどの家で立てていない。こういうことじゃ日本人はダメだということを、事実をもって示してやったんだ。うちの門を見て、「あの野郎は国粋だ」なんて思ったかもしれないけど。これは神さまが私にそうしろと仰ったから。日本国民は世界最高の国旗を何だと思っているか、自分自身が本当に国旗にならないでどうするかということです。

日の光をいただいたら、真っ白になる。影なんかなくなってしまう。白地というのは、これが無者ということです。赤い丸はキリストですよ、キリストという霊界の太陽です。だから、

「キリストの無者」を国旗は我々にとっては表すということ。もう、私の中には異言的なものが来ています。そういう事態を、日本人が国旗を誇りとする尊厳を持たないでどうするか。藤井先生が言ったけれども、「日本よ、滅びよ」と言いたくなるよ、正直。

どうぞ、皆さんは、福音のためには棄身の態勢でものを言わなければいかん。こんな素晴らしい国旗を持っていて、万国に冠たる国旗を持っていて、それを粗末にしたり、それをまるで軍国主義みたいに考えてみたり、何事かと。本当にもうしょうがないね。憤慨に耐えないんだ。

私は集会を毎回、一回かぎりの棄身でやっています。やむを得ずいらっしゃれない時はいいですけれども、私はとにかく続けている。「とにかく」というのは、いい加減な、習慣でということじゃないですよ。

●神の像に即して

それから今度は、第三日目には、地に草だとか木だとか、要するに実り豊かな植物界が三日目に出来た。四日目は、日月星晨、天界。その次に五日目は、生物、主に鳥や魚。六日目が家畜、爬虫類、獣類。動物の中では高等な方です。猿なんかもその中に入る。これは六日目の始めの方だ。後半になると、これが最後の創造になって、人間の創造になる。この人の創造のところだけが違うわけです。創世記1章26節から、

26 **神 言い給いけるは我儕に象りて我儕の像の如くに我儕人を造り、之に海の魚と天空の鳥と家畜と全地と地に匍う所の諸の昆虫を治めしめんと。**

人間がそういった万物を治める。ところで、「我儕の像の如く」とあるのが困ってしまったね。神さまは「我らの像」と、なぜ複数で言うか。これが困ってしまった、聖書は。

「我らというのは、天界のキリストと聖霊と神の、三位一体の我らだ」

なんて、後からくっつけたような理屈を言う。そう解釈する人がありますよ、悪くないかもしれない。けれども、ここらはやはり神話的な要素が入っている。「エロヒーム」という言葉がだいたいおかしな言葉なんです。「エール」（単数）というのは神さま、「エロヒーム」というと複数になる。「神々」という字、もともと複数なんだ。

「神 天地を造り給えり」

という。「エロヒーム」と書いてある。直訳すれば、「神々は」という。複数形で書いてあるのを受けた「バーラー」（創造する）という字は正に単数の三人称ですから、「エロヒーム」という複数名詞を単数に取り扱っているわけです。これを文法的にいうと、「荘厳の複数」（プルーラリス・マーイェスターティス、Pluralis Majestatis）と言う。それが今度は、文字の上で多少神話的な要素がそこに入って、ついここに「我ら」なんていう表現になってしまった。「我」でいいんです、「わが像の如くに」と。それを「我ら」といった。他の神々も知っているんですよ、他の民族の他の神々も。そういうことも多少裏にはあるらしい。こんなのはあま

り理屈をつけない方がいい。なるほどまだ神話的要素が、多神的な要素があったなぁと。けれども今度は27節になると、

27神 其像の如くに人を創造たまえり。即ち神の像の如くに之を創造、之を男と女に創造たまえり。

「神その像の如く」といって、ここは完全に「その」は単数になっています。「創造した、創造した、創造した」と三回、「バーラー」という字が書いてある。

「神はその像の如く人を創造した」

という。「像」というのは「セレム」という。ラテン語で「イマゴデイ」「神の似姿」という。「神の像に即して」ということです。「如くに」という訳はあまりよくない。「の如く、の様に」ではない。神のかたちに即した、同質なんです。即して造った。

では、「人間は神さまと同じかたちか」なんて、「かたち」と言いましても、それはしょうがないです、神話的なものの表現をするんだから。するけれども、偶像にはしないというところに、彼らの霊的な健全性がある。

あとの預言書になると、神さまを「父」という字が出てきます。イザヤ書なんか、「父なる神」という言い方が出てくる。キリストが持ってきたのは「父」ですから。神さまを本当に「お父さん」として、キリストは自分はその「子」だとしてます。そういった人格的な神と同人格、同質の人格体として造った。難しくいえば、「神と同質の人格体」として造ったということになるんだ、「神の像の如く」というのは。同質の人格――これは「神格」だけれども、人格と言ってはおかしい。神さまは人ではない――だから、神格的に造られている。

「神の神格をもって人を造った」

と言えば一番いいかもしれない。神と同じかたちだから、神格。我々は人格者でなくて、本当は神格者なんだ。その神格の神性を失ったのが「パラダイス・ロスト」（楽園喪失）というわけだ。本来そうなんです。

ゲーテなんていうのは、その神性、「ゴットハイト」というものを率直に受けとっている。彼は非常に明るい。

「自分は太陽の子（ゾンネンキント）だ」

と言っている。時計の長針と短針が中天を指していた時に、時計が鳴っている時に生まれたんだと。そんな人はちょっと珍しい。さすがは、ドイツの最大の詩人だ。「ゾンネ」「太陽」が非常に好きだ。ドイツ語では「ディ・ゾンネ」と女性形でいう。日本の天照大神は女神だね。ちょっとそんなところが似てるけれども。「天照大神」とは素晴らしい名前ですよ。キリストの神さまは正に天照大神なんです。これは日本の民族神だけれども、その民族神を突き抜ければ、天地創造の神になってしまう。

●霊止

そういう神と同質の神格として造られたから、人というのは「霊が止まる」「霊止」と書く。これを男と女に造った。ここの「男と女」という字は、あとから出てくる「男と女」（創2・23）という字とは、字が違う。あとのは「アダム」という字から出てきた。これはいわゆる男と女という字です。人間の創造が創造の最後の冠であったという。そして、

28神彼等を祝し、神彼等に言いたまいけるは、生めよ、繁殖よ、地に満盈よ、之を服従せよ、又海の魚と天空の鳥と地に動く所の諸の生物を治めよ」

と。こうやって祝福されている。万物を支配する、治めるといったようなことが書いてある。ところが、この治め方が悪いものだから。どこまでも神さまのものなんだよ。万物は神さまの物なんだけれども、自分の物として治めて、自分勝手に使って、自分の利益になるように勝手なことをするから、とうとう文明は公害現象となった。

このことはゲーテが既に予言している。

「もっと自然と親しみ自然を尊重しなかったらば、今に必ず人類は困る時が来る」

と、ゲーテの言った通りです。

そこは、日本人は自然と親しみ、自然と融けるという角度を持っている。だから、日本人の生活の仕方は非常に本当はいいんだよね。それをすっかり西洋の真似しちゃって、おかしなことになっちゃった。日本人は本当は木造に住んでいる方がいい。野菜でも何でも自然がいい。我々の生命と自然の生命とは延長している。交わっている。

だから、私は、花を見れば花となり、木を見れば木となるという、そういう境地が大事だと言う。

「あれをひとつ何に使ってやろうか」

なんて、そういう功利打算の気持でやるからダメになっちゃう。

牛だってそうだよ、「牛は結構な動物で、何にでも役に立つ」なんて。牛の霊が今にくってかかるぞ。人間が動物を勝手にやっていると、霊の世界はごまかしがきかないですから、えらいことになる。これは必ず、やむを得ざる悪を犯しているからね、人間は。あの活き作りなんてのはよくないね、活き作りなんて食べたりして。あれは拝んで食べなければ、もし食べる時には。とんでもないですよ、「うまい、うまい」なんて冗談じゃない。結局、そういう残酷なことをしていると、自分たち自身が今度はお互いに残酷なことをして亡びていく。もう天網恢恢疎にして漏らさず、法則はちゃんと厳としてある。だから、やむを得ざる悪を犯しても、これはやむを得ないといって諦めるのではなくて、必ず平伏した魂でなくては。だから、慰霊祭というのは大事なことなんです。蛙の目玉を120もいろんな実験に使っていたら、一夜、夢魔におそわれて、蛙の大軍がやってきて、その学者はもの凄く苦しんだという。生きた蛙を生体解剖みたいなことをしてとんでもない。まぁ学問上やむを得なかったのなら、大いに拝んでおかなくてはいかん。ことに蛇なんていうのは恐ろ

しいですよ、霊的動物だから。

今年は蛇年だから、私は年賀状の蛇の横で子どもが笛を吹いている絵に――

「笛吹けども、踊らず」

とキリストが言ったね――だから、

「笛吹けば、ガラガラ蛇は踊るかな。笛吹けど、踊らざるかな、今の世は」

なんて、私は時々書いた。福音の笛を吹いたってひとつも踊らない。蛇の方が踊る。

●安息日

人間の創造が、神さまの創造の生命ですよ、神さまの創造は生けるもの。星やなんかもそうだけれど、生命の創造は神さまでなければできない。人間はとにかく神と同質に造られたということ。プロテスタントは

「罪びと、罪びと」

なんてことばかり言ってるけど、本来同質であるというこの自覚も極めて大事なんです。だから、仏教の世界では悟りの世界に入ると、そこに入るわけです、禅宗は。仏教でも、もちろん全部が悟りではない。南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華経の救済的な角度もある。しかし、仏教はどちらかというと、その在る本来の姿に悟り入ること、悟入することが仏教の世界です。仏教でいうと、罪は迷いであるという。煩悩は迷いであると。

第1章は「P記事」〔Priesterschrift プリースター・シュリフト〕といいまして、祭司資料です。旧約聖書の資料は大きな四つの資料〔J（ヤハウィスト資料）、E（エロヒスト資料）、D（申命記史家）、P（祭司資料）〕からできあがっている。これはほとんど定説的なことですが、その祭司典の第一に出てくるのが創世記第1章なんです。これが紀元前5世紀頃。ところが、第2章以下は、「ヤーヴィスト」といいまして、2章からはただ「神」と書いてない。「エホバ」とか「エホバ神」とか書いてある。神さまのことを「ヤーヴェー」というでしょ。即ち神をヤーヴェーと言っている筆者たちを「ヤーヴィスト」という。それは神話的にもっと古い、紀元前9世紀、8世紀の筆になっているから、もっと素朴なんです。創世記2章の3節までは、本当は1章に属するんです。4節から、厳密にいうと3節の後半からですけれども。

七日目に神さまは創造の業を休んだという。そしてこれを、

[3]神 七日を祝して之を神聖（きよ）めたまえり

七日を祝して、これを聖めて、聖別して休んだと。それから、ユダヤでは金曜日の夕方から土曜日の夕方は聖別された安息日、「シャーバット」という。シャーバットは休み、安息。だから、「ザバットターク」（土曜日）とドイツ語でいうし、英語でも「サバス」というでしょ。あれはヘブライ語からきている。安息日のこと。

七日目ごとに休むというのは、我々の生活でも実はひとつの労働と休息のリズムになっていいわけです。日本人はそれをやらないわけだ、宗教的に。日曜も何だかゴタゴタしちゃっ

たりね。また日曜日も何か仕事をしてみたり。この頃はだいぶ変わってきましたけれども。向こうの真似して土曜日の午後から仕事をやめたり、あるいは土曜日から休んだり。これはヨーロッパがそうだから。けれどもそれならば、日曜日はちゃんと本式に宗教的な在り方になるかというと、そうじゃない。ヨーロッパでもだいぶそこは乱れていますけれども。しかし、何といっても伝統的にはやってます。日曜日になれば本当に静かになる。教会は全部開いていますから。まぁ生命はだいぶ抜けてしまっているけど、それでもとにかくやっている。私はハンブルク教会で、

「みんな自分の聖書を持って来ないからダメだ。聖書は生命の延長じゃないか。それを教会に備えてある聖書や讃美歌を読んだりしてやっているからダメだ」

と、牧師に言ってやったら、

「プロフェッサー小池がこう言ったから、みんな聖書を持って来なさい」

と言っても、やっぱり持って来ない。それでもとにかく日曜日を守る人がかなりいます。そういうわけで、安息で休むんだけど、我々は日曜日は、この世のことはやらない。しかしながら、この集会で本当に力を得て進んでいく。

それなのに、なぜ、集会に来ないんですか。人間小池ではないんですよ。この破れ器を通して迸っているものを本当に共感をもって受けとっていけばいい。私が破れ器だからいいんです。私が完全な器だったら、人間小池にとらわれる。そしたら、神さま・キリストはいい加減になってしまう。

「神さま・キリストさまによってでなければ、私は生きていられない」

という、そのことを私は告白しているんだから。それなのに、

「小池先生がどうだこうだ」

と言っているやつはさっさと出て行けと言いたくなるんだ、正直。皆さんがもしそうだったら本当に出て行ってください。私を相手にしているのなら。私は真理のためには、白熱の如きものを持っていますから、絶対に退かん。まぁ他の集会へ行ってもいいよ。いわゆる霊的とかいっても、絶対に負けませんよ、私は。そういったことで、私はなぜ孤軍で万軍であるかというと――私は孤軍です、正直。味方はいません――けれども、天の万軍が私の本当の味方です。私の中には烈々たるものがある。ですから、私は為すべきことを、この神さまの召命を、全十巻を貫く。どんなに借金してもいい。助けてくださらなくてもいい。私はやります。その先なお十年間、何をやるか。もう私は本当に、このキリストの霊的な福音に全身が焔（ほのお）の如くになっていて、黙っていられるかというんだ。どうぞ、私の言葉は荒々しかったですけれども、気合は受けとってくださいよ、気合は。

●神気と土器

今度は第2章、土でもって人を造って、その中に神の生命の気を吹き入れたという。創

世記1章の27節と創世記2章の7節、これは極めて大事なところです。

7エホバ神 土の塵を以て人を造り、生気（いのちのいき）をその鼻に吹き入れたまえり。人即ち生霊（いけるもの）となりぬ。

この場合の「霊」は「ルーアッハ」という字ではなくて、「ネフェシュ」という字ですけれども。とにかく神の気が、神気が入った。こっちは土器なんです、土の器。パウロが、

「この土の器に宝を持っている。キリストという活ける宝を持っている。この キリストの力が現れんためである」

と、言っているじゃないですか。即ち、「神気」、あるいは「天気」と言ってもいい。天の気が入ってきた。こっちの方は「地気」といったっていい。要するに、人間というものは天地が総合されている存在なんです。神の似姿であるけれども、ただ霊的なものじゃない。天的なものと地的なもの、この総合体が人間である。そして、もちろん神気が中心であります。ここに霊がある。ここに神気がある。こちらが器です。

我々が、心があるとか、魂があるとか、霊があるとかいうのはみな、こちらの要素です。この神話的表現においてそのように、この土器は即ち肉、肉体です。こっちは霊です。霊肉渾然たるもの。これは分けることはできない。

キリストもまた地上においてはこうであった。キリストもまた危機的存在であった。いつでも罪を犯す可能性を彼も持っていた。けれども、キリストは常にこれ（霊）が本当に中心になって働いていた。神さまが中心ということ。この線が切れないで動いている。ところが、我々罪びとは、これがしばしば切れている。あるいはまた薄い。そうすると、これが中心と思っているけれども、この霊（魂）が、この心が、「自我」というものに切り変わっている。これが「罪」なんです。自我意識に切り変わるところが罪なんです。まぁ、罪の問題はこの次にしますから、よしますけれども。要するにそういう構造です。超在なるものと内在なるもの。

さきほどの日本の国旗を見てください。太陽はもの凄い力をもって地球を引っ張り回している。だから、この地球という存在は全く太陽中心の存在なんです。それを思うだにもう素晴らしい霊的な真理を表している。地球それ自身が、太陽中心で動いている。自分では動いていないんだから、完全に引っ張り回されている。地上のものはみんな太陽に生かされている。この光熱で生かされている。私たち自然的存在は正に太陽に絶対に依存しています。自然的存在は、私たちの肉体的存在は、太陽に絶対依存している。だから、地球にとって太陽は絶対的なものです。

では、私たちの肉体の中にいるこの魂は神さまに絶対依存しなければならないはずなんだ、アナロギア〔類比、類推〕から言いましても。「宗教」なんて言わなくたって全くその通りなんだ。だから、魂は絶対に霊的太陽なる神に依存している。そのことに気がつけばいいんだ、気がつけば。信ずるもヘッタクレもないんだ、本当は。気がつけばいいんだ、気

がつけば。「信ずる」なんてもったいぶったことを言う必要はない。気がつかなくちゃいかん、そのことに。地球はお天道さんに引っ張り回されているじゃないかと。そのように私たちの魂は、神さまに本当は引っ張り回されて、それで生きているんじゃないか。それで神さまなしに生きたような顔していて、何ぬかすか、平伏せと。御霊の権威です。私たちは霊が吹き入れられたから、本当に生きている。私たちが生きているということは、神の霊によって生きている。そのことにハタと気がついたら、もう全身は平伏して、「神さま！」と言うことじゃないですか。そうしたらば、無即無限無量なことになってくるんです。

●生命の樹と善悪を知る樹

8 **エホバ神　エデンの東の方に園を設けてその造りし人を其処に置きたまえり。**
9 **エホバ神　観るに美麗しく食うに善き各種の樹を土地より生ぜしめ、又園の中に生命の樹および善悪を知る樹を生ぜしめ給えり。**

おもしろいことが書いてある。生命の樹と善悪を知る樹。そして何と言ったかというと、

10 **河エデンより出て園を潤し彼処より分れて四の源となれり。**

また河あり、そしてエデンの園がある。

16 **エホバ神　其人に命じて言いたまいけるは、園の各種の樹の果は汝意のままに食うことを得、**17 **然ど善悪を知るの樹は汝その果を食うべからず。汝之を食う日には必ず死ぬべければなり。**

おもしろいね。何でも採って食べていいが、「善悪を知るの樹」は食べてはいかん。「生命の樹」は食べていい。生命の樹を食べればよかったんだよ、先ず生命の樹の所に行ったらよかった。それを、生命の樹の所に行かないで、食べてはいけないと言った所へ行った。蛇に誘われて。生命の樹及び善悪を知る樹でしょ。学問や道徳よりも先に、生命の樹というのは本当の宗教の世界を言っているわけです。霊的生命のことを言っている。

「ああ！　生命の樹か、これがいいなぁ！」

と言って、なぜ行かなかったか。善悪の方に行ってしまった。こざかしき「善悪の樹」を食べようということをサタンに言われたことは、今日は言う必要ない。

「食べるに善く、目には美麗しく、賢くならんためには好ましい」

なんて。これは私は「宗教と文化」の中に書きましたから、そこを一々言いません。あそこを読んでみてください。第一巻（『無者キリスト』：第三部無的実存：第5章）に出ています。

●わが骨の骨、肉の肉

それから今度は、

18 **エホバ神　言いたまいけるは、人独りなるは善からず我彼に適う助者を彼のために造らんと。**

こういう面白いことが書いてある。それから、いろんな空の鳥やなんかの名前をつけさせた。そうしたらその名となった。だけど、アダムにはこれに適う助けがいない。そこで、

21是に於てエホバ神 アダムを熟く睡らしめ、睡りし時その肋骨の一つを取り肉をもてその処を填塞たまえり。22エホバ神 アダムより取りたる肋骨を以て女を造り、之をアダムの所に携きたりたまえり。23アダム言けるは、此こそわが骨の骨わが肉の肉なれ、此は男より取りたる者なれば之を女と名くべし

と。

23節は面白い。心臓のところから肋骨を一つ取って、女性は肋骨から造られたなんて、どういうところからそんなのが来たろうかね。胸、心臓、ハートに近いところの骨ということなんでしょうね。本来、「人」「アダム」は――「アダマー」とは「地面」という字です――地面から取られたから「アダム」「土から取ったもの」という意味だ。アダムの一部分、特に心臓部の骨を土台にして女を造ったという。おもしろい神話です。だから、男女の元は一であった。一が二になったというわけです。二にして一ということになる。これはプラトンもそれ式のことを言っている。本来は一つのものであったが、それが二つのものになった。だから、この二つは決して分かれる二つではない。二にして一であると。

「2＝1、1＋1＝1」

となる。ただこっちの「1」はちょっと太くなる（笑）。こんなことを言うやつはあるかね。これはゴヂックで書かなくてはいけない。本来一つでは寂しいから、そこから出来上がったものとなって、二つになって、これで対話ができる。助け合う。これが夫婦関係だと、すぐあとに書いてある。「親から離れて二人のもの一体となるべし」と。結婚式の時に私は時々ここを引用することがある。アダムは、

「これこそわが骨の骨、わが肉の肉」

と。これは詩なんです。ヘブライの詩で一番古いものの一つです。「わが骨の骨、骨中の骨だ」という。「骨の骨」というその「骨の」は複数です。「ヘセム」という字が「骨」という字です。「バーサール」という字が「肉」という字です。

「ヘセムのうちのヘセムだ、バーサールのうちのバーサールだ」

という言い方です。そして、これは男から取ったから――「男」という字は「イーシュ」という――「男から取ったから女」といっても、なぜ「女」と言うか日本語ではわからないでしょ。ヘブライ語では、「イーシュ」（男）から取ったから「イッシャー」（女）と言うと書いてある。「イーシュ」という字から変形して「イッシャー」という。「アー」という字は女性語尾なんです。

「イーシュから取ったからイッシャーという」

と。マルチン・ルターは、「マン（男）から取ったから、メンニン（女）」と、「マン」をドイツ語の女性語尾にして「メンニン」と訳している。そこはドイツ語はうまくいっているよな。

ルターはそう訳している。日本語では、「男から取ったから女」と言ったらいいじゃないか。そう訳した方がいいね。そうならだいぶ近いから。女というのは、「おみな」から来たんですよ。これが音便でもって「おんな」になった。

24是故に人は其父母を離れて其妻に合い二人一体となるべし。25アダムと其妻は二人ともに裸体にして愧ざりき。

何も隠さなかったと。まぁこの頃だいぶそういうのが流行るけれども。楽園では、神さまの造ったものはみな美わしいんですから、何もまとう必要はないんだ、本当は。女性は最大の傑作だから。棟方志功もだいぶ作っていたね。私の今度の本（著作集第2巻『芸術のたましい』１９７６年刊）にも出ているけれども。女性観世音なんて。まぁ女体は最大の傑作でしょうね。だから、芸術作品は、ロダンだとかみんなそういうふうに作るわけですよ。

●神の創造力をいただく

創世記1、2章のところはそれでいいです。創造神というが、私たちは創造神をただ創造神と拝んでいたってしょうがない。我々自身がこの創造力をいただかなければしょうがない、創造力を。創造の力は何かというと、いうまでもなくこれは御霊です、霊です。だから、信仰も本当に使徒的信仰、預言者、使徒たちのキリストを中心としたところの、この霊的現実に入ると、創造神と同じ力の世界に入って行く。イザヤ書40章27節に、

27ヤコブよ、なんじ何故にわが途はエホバにかくれたりというや。イスラエルよ、汝なにゆえにわが訟はわが神の前をすぎされりとかたるや。28汝しらざるか聞かざるか、エホバはとこしえの神、地のはての創造者にして倦みたもうことなく、また疲れたもうことなく、その聰明こと測りがたし。29疲れたるものには力をあたえ、勢力なきものには強きをまし加えたもう。30年少きものもつかれてうみ、壮んなるものも衰えおとろう。31然はあれどエホバを俟望むものは
新たなる力をえん。また鷲のごとく翼をはりてのぼらん。走れどもつかれず歩めども倦まざるべし。」（イザヤ40・27～31）

「エホバを俟望む」というのは、エホバに信頼し、エホバにとりすがるものは、神さまに連なっていれば、そのような創造力が内側に入っているから疲れないと。

私は、「ああ疲れた」ということはほとんど言わない。「眠い」ということは言いますよ。けれども、「どうも疲れてしまったな」なんてなことはほとんど言わない。ということは、この神さまの力でもって、いわゆる疲れをしらない人になった。もちろん、人間だから疲れることは疲れますよ。けれども、「ああ疲れた」なんて情けないような言葉は出なくなってきた。ありがたいよ、本当に。また、神の創造的な知恵も湧いてきます、直感的に。新しい表現、新しいものが造られてくる。特に芸術の世界では、神さまは最大の芸術家です

から、神さまという最大の芸術家に自分を投げ込んでいけば、芸術作品はぐんぐん展開する。

●霊に憑かれて論理的な運びではない

今度の第二巻を読んでくださいよ。ことに最初の「芸術のたましい」は、私はこれは会心の作なんです、正直。これは憑かれたようにして書いたからね。霊に憑かれて、筆は論理的な運びではない。次から次へと湧いてくるような運び方です。

神の霊が最も百％に現れたのがキリストです。キリストは「創造神」ということはあまり仰らない。「父なる神」と仰った。キリストにおいていかにその言葉といい、その業といい、その創造的な力が自在に現れているか、桁違いです。次元がちがう。これは父なる創造神の――イザヤ書には「創造の神」というのと「父」という字が二つ出てきますけれども――それをキリストは渾然としてつかまえてしまっているわけだ。特にイザヤ書は、キリストは愛読されたでしょうね、おそらく。ですから、我々はこのキリストに本当に生きると、

「われ汝のうちに、汝わがうちに」

となったら、創造的な人になる。行き詰まらない。

梅村君が円現塾をやっていれば、生徒たちが自然に集まってくる。私はあそこで塾生に一番先に語ってやった。もう目を皿にして聴いていたよ。幾人かのお母さんたちが泣いて喜んでいた。いわゆるバタ臭いようなキリスト教を私は語っていませんから。

預言書を相当引用しようと思ってたくさん用意してあるんだけれども、もう時間になったからよそうね。アモス書4章、5章、9章。エレミヤの10章。イザヤ書の65章、66章あたりを見ると面白いですけれども、まぁ自分で読んでください。要するに、御霊をいただくと、私たちは期せずして創造的な人間になってくる。何かものが湧いてきて困る。学ぶところから造り出だすことになる。これは無作の作という。

「御霊の世界に入ったら、男も女も、奴隷も自主もない」

とパウロが言ったでしょ。パウロさんはすごい構造の人です。聖書はとにかくよく読んでくださいよ、もう破れるほどに。私はもう聖書を3巻読み破ったから。私たち自身が生ける聖書とならなかったらつまらんですよ。

どうぞ、そういうことで、今年は神・キリストの創造的な力をもって躍進また躍進、本当の元気が出でざるを得ない。「元気をだせ」ではない。元気は出でざるを得ない。まぁこの集会の人はおとなしい人が多いけれども。私なんかは本来おとなしいんだよ。だけれど、御霊が来ちゃったらしょうがなくなっちゃった。私みたいな弱虫がどうしてこんなに強くなったろうかと。皆さんも、「私はなれない」なんていう人は正直、一人もないんです。私より強い人ばっかりだから。私は本来弱虫の泣き虫なんです。それではおしまい。